

# ワークに向けてのHAYST法 全体図のおさらいと ワークの全体流れ

2018/5/25  
JaSST東北実行委員会



# HAYST法の目的

- 機能だけでなく仕様書に書かれない製品のあるべき姿「目的機能」をテストする
- テスト対象となる製品において「常に」満足してもらいたい
  - 短期的（例：半年後）
  - 中期的（例：1年後）
  - 長期的（例：買い替え時期）



# HAYST法のテスト開発プロセス

## 1. テスト戦略

D-Caseで行う

## 2. テスト要求分析

## 3. テスト設計

## 4. テスト実装

## 5. テスト実施

## 6. テスト結果分析

# HAYST法のテスト開発プロセス

1. テスト戦略
2. テスト要求分析
3. テスト設計
4. テスト実装
5. テスト実施
6. テスト結果分析

デシジョンテーブルを使ったり  
状態遷移表(図)を使ったり  
直交表を使ったり  
テスト設計に即した  
やり方で行う

# HAYST法のテスト開発プロセス

1. テスト戦略
2. テスト要求分析
3. テスト設計
4. テスト実装
5. テスト実施
6. テスト結果分析

直交表の性質を利用した  
統計分析で行う

# HAYST法のテスト開発プロセス

1. テスト戦略

2. テスト要求分析

3. テスト設計

4. テスト実装

5. テスト実施

6. テスト結果分析

## 今日の範囲

テスト要求分析

6W2H

ユーザーストーリー

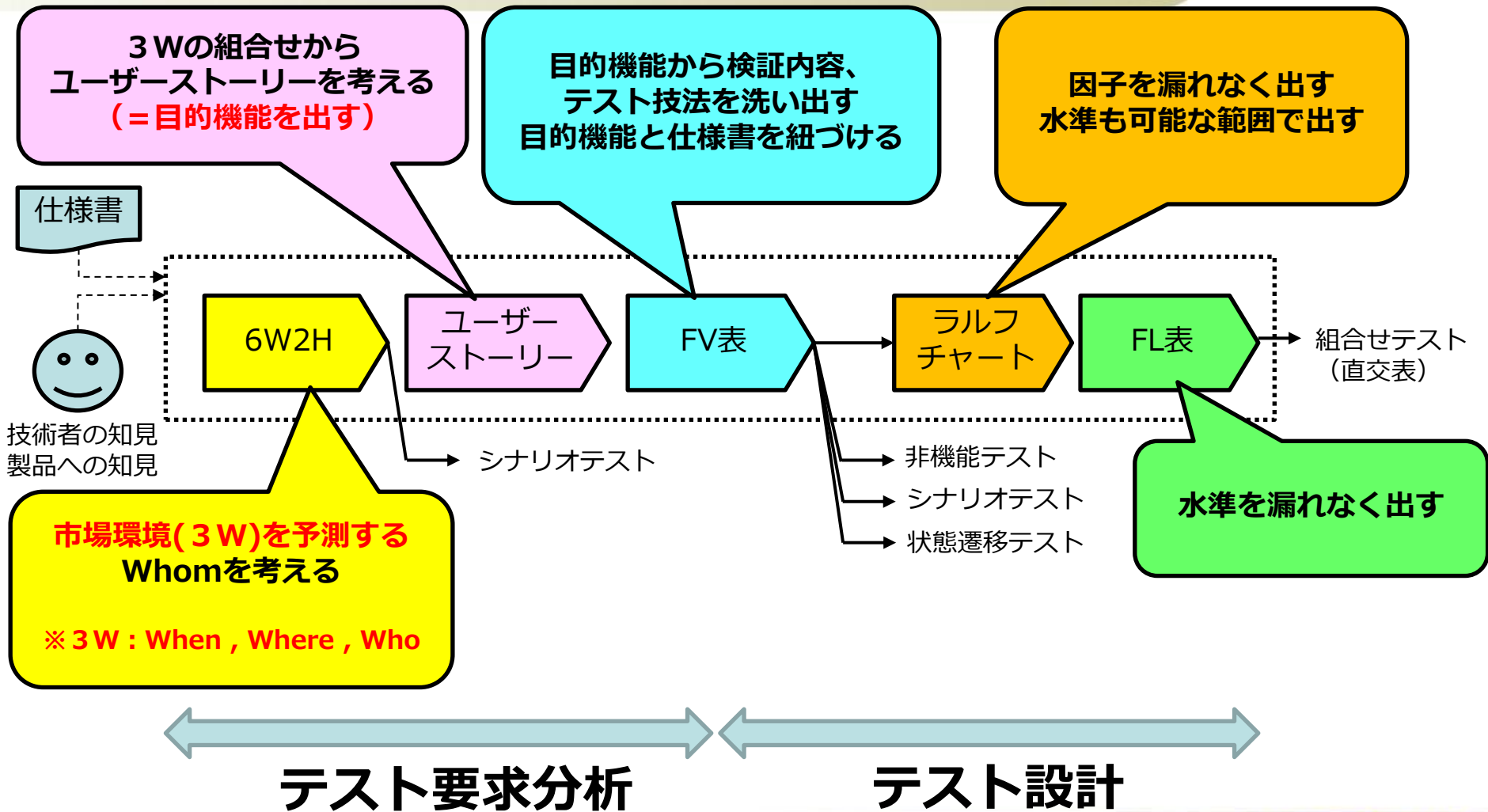
FV表

テスト設計

ラルフチャート

FL表（※講義とデモのみ）

# HAYST法 今回のワークフロー

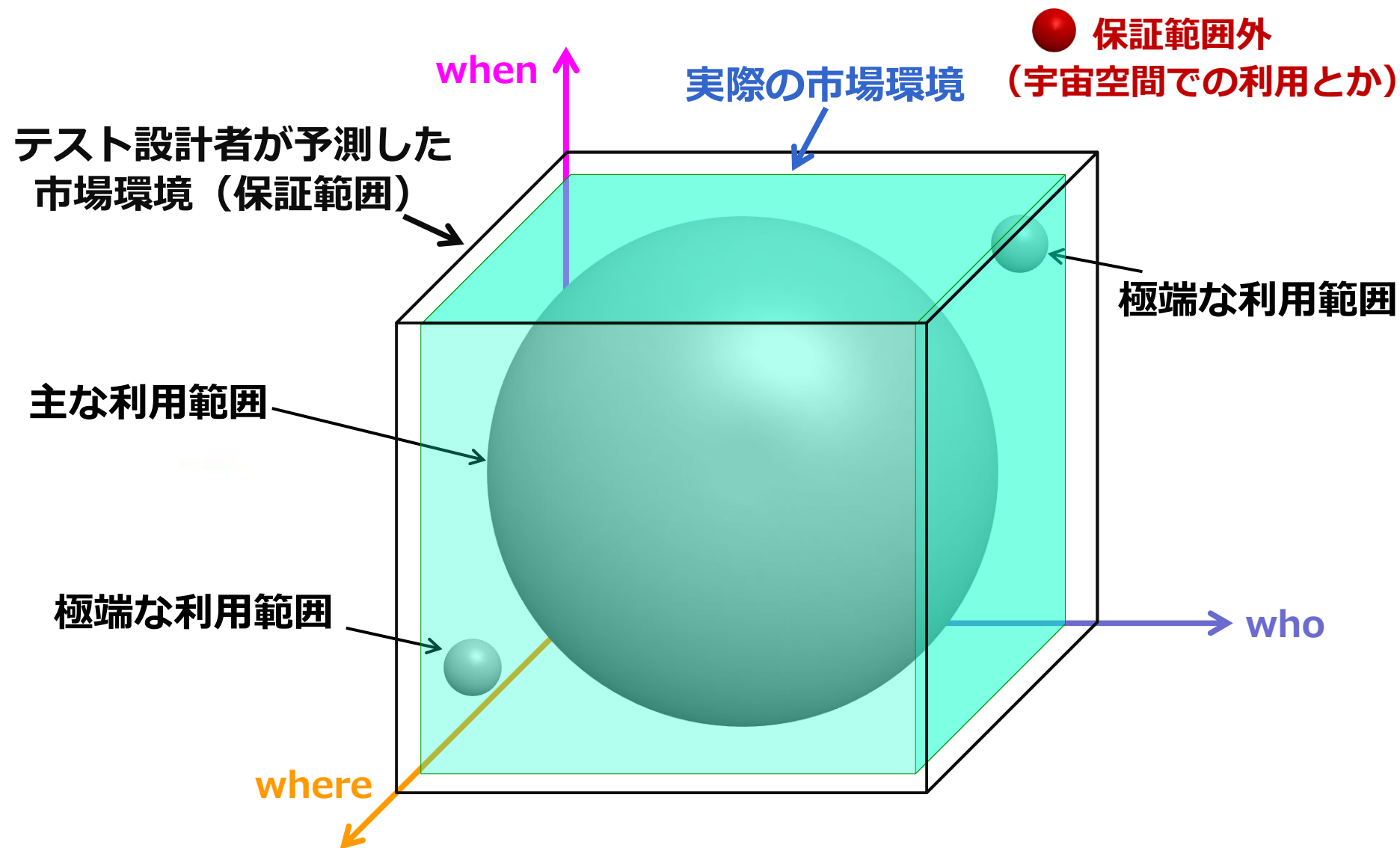


とても大事なので  
HAYST法の  
テスト要求分析について補足  
(市場環境(3W)、目的機能)



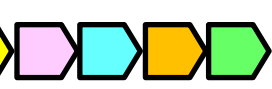
# 市場環境(3W)の予測

6W2H



# 3Wと製品ライフサイクル

6W2H



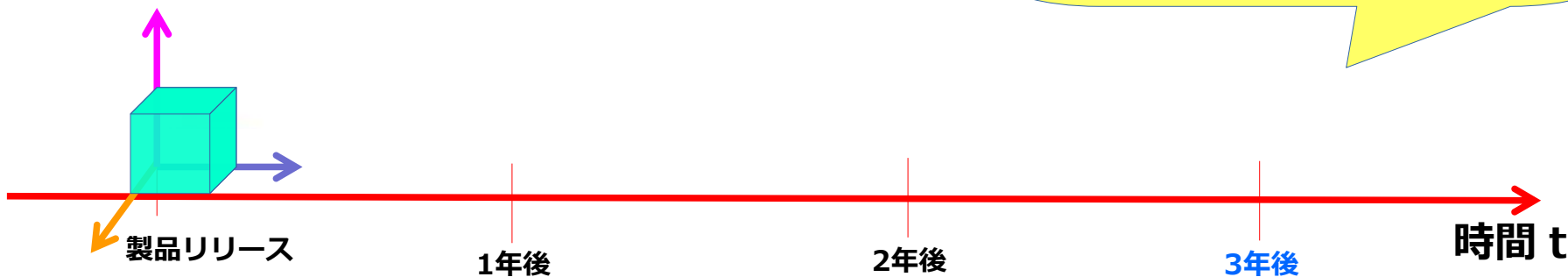
いつの時期の3Wを考えるか？

製品の「ゴール」を考える。製品の「ゴール」はライフサイクルの最後  
(製品ライフサイクルの最後まで利用者を満足させないとリピートして貰えない)

開発者（発注者）の要件は、出荷時点を意識している場合が多い

例) 製品ライフサイクルが3年の場合

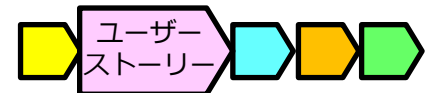
製品を使い終わる  
時期「まで」の3Wで考える



「事例とツールで学ぶHAYST法」(秋山 浩一：2014年)

「サポートが終わるまでこの製品を取り巻く環境はどう変わるだろう？  
それを前提としたときにこの機能で良いのか？」検討する

# 目的機能の導出の仕方



## 製品のあるべき姿から導出する

→HAYST法ではユーザーストーリーを使用する

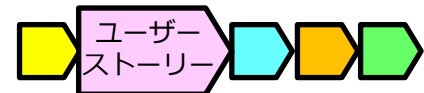
例) 携帯用ミュージックプレイヤーの場合

仕様として「早送りすること」とあった場合

1. 無音で高速に「早送り」ができればよい
2. 聞き取れる速度で高速再生される「早送り」ができればよい

みなさんは、どちらの「早送り」をあるべき姿だと考えますか？

# 目的機能の導出の仕方



例)携帯用ミュージックプレイヤーの場合

仕様として「早送りすること」とあった場合

1. 無音で高速に「早送り」ができればよい
2. 聞き取れる速度で高速再生される「早送り」ができればよい

1, 2 どちらが対象ユーザーの満足度につながるのか考えることが大事

「xx:xxの時間まで、すぐ飛ばしたい」なら1番

「聞きたい区間を探したい」「早口のヒアリング力をあげたい」なら2番

→仕様だけでなく、製品への知見やユーザーストーリーを考えると

あるべき姿を導出しやすい（あるべき姿を「目的機能」と表す）

# HAYST法の流れについて補足

# ソフトウェア開発工程

伝達と合意

要約と伝達

システム  
要件分析

システム  
適格性確認テスト

システム  
アーキテクチャ設計

システム統合と  
統合テスト

ソフトウェア  
要件分析

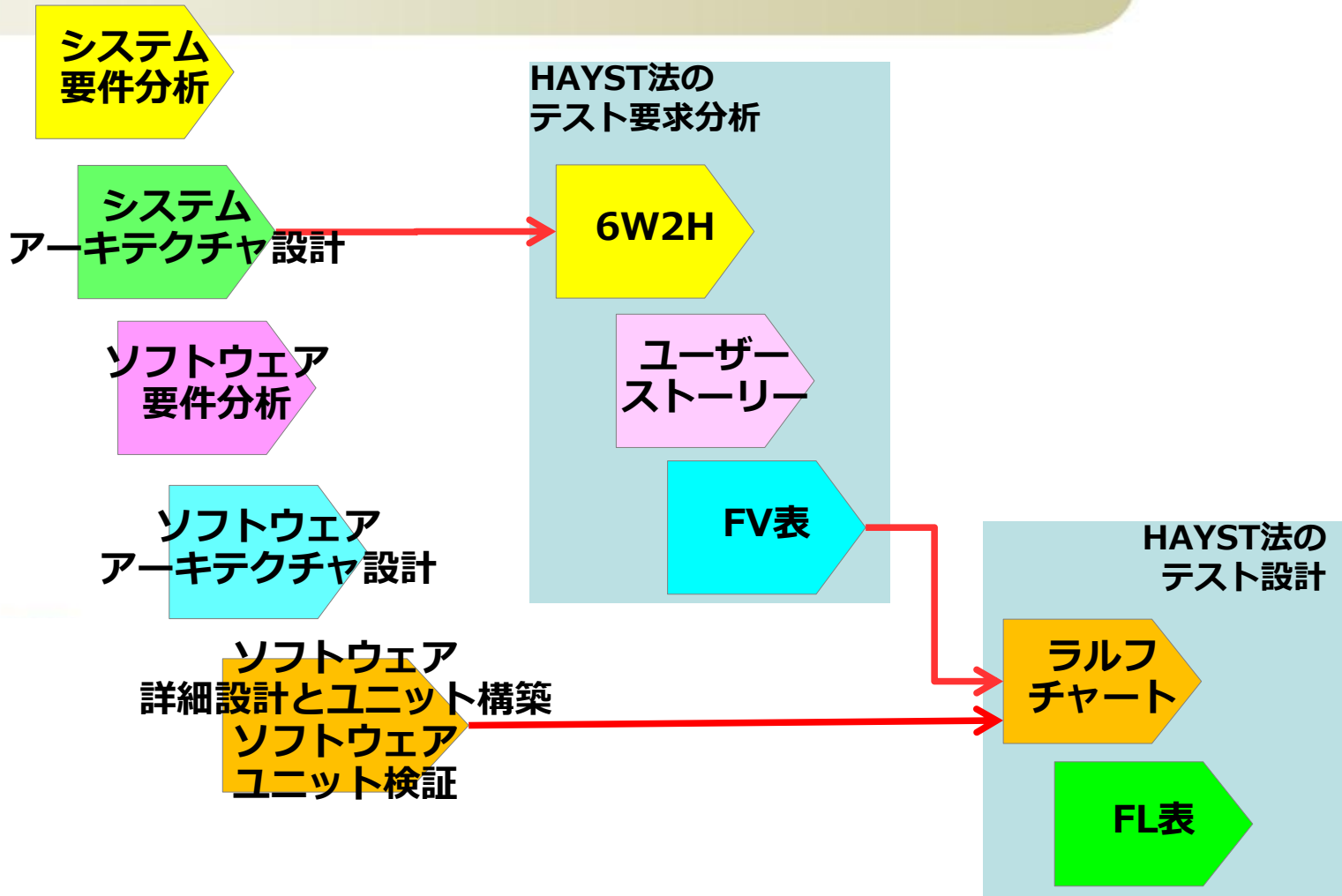
ソフトウェア  
適格性確認テスト

ソフトウェアアーキテクチャ設計

ソフトウェア統合と  
統合テスト

ソフトウェア  
詳細設計とユニット構築  
ソフトウェア  
ユニット検証

# HAYST法の理想的な適用タイミング



システムの仕様書から、6W2H～FV表作成までを実施  
ソフトウェア詳細設計書から、ラルフチャート以降を実施

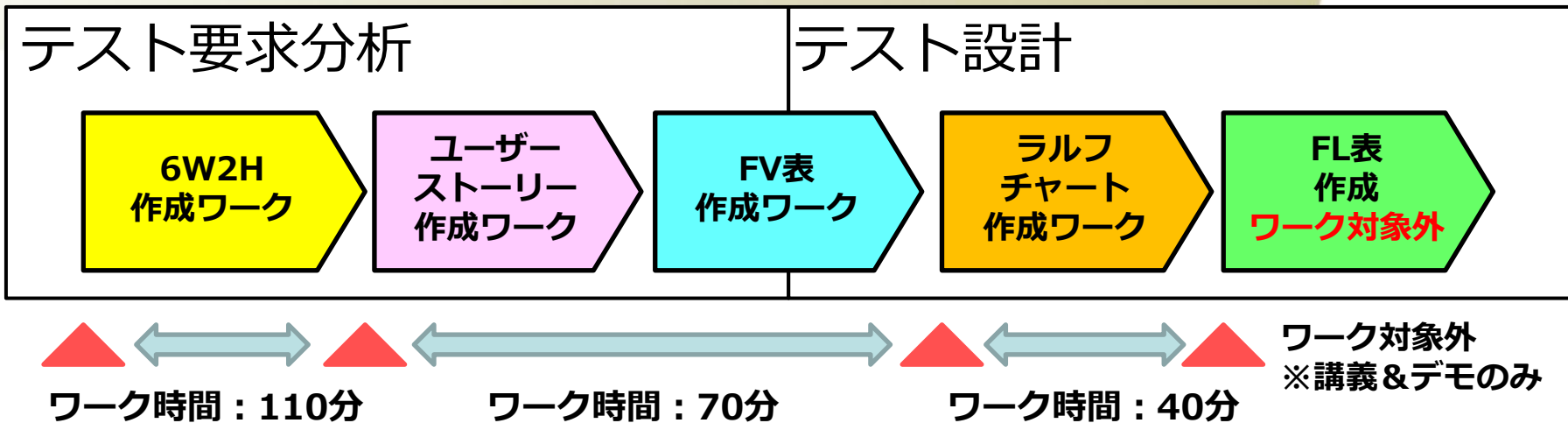
# おさらいまとめ

- **保証範囲を明確にするため、市場環境（3W）を予測する**
  - 予測時、製品ライフサイクルを意識する
- **目的機能は、製品のあるべき姿から導出**
  - 満足度高く、製品を使用してもらえるようにみなさんの知見や3Wを組み合わせて考える

**3W : When, Where, Who**



# 今日のHAYST法ワークの流れ概要



## 補足説明

▲ : 休憩タイミング

JaSST'18 Tohoku  
HAYST法ワーク  
(限定版)

おさらい  
おわり

# Appendix

# 未来スライダー

オススメ

JaSST Tohoku実行委員は、  
時系列を「あるポイント」ではなく、  
継続した時間軸（帯）で捉える考え方を  
「未来スライダー」と名付けた  
HAYST法だけでなく、他の開発手法でも、  
とても有効な考え方なのでオススメ！

